



第一話 ロリン

ぼくの住む柑子（こうじ）町の裏山を川沿いに上っていくと台地があって川が細くなりやがてちょろちょろ水になり小道もなくなり、じゅくじゅくした地面を歩いているとすぐ森になります、そこで行き止まりです。

だいが前のあるときぼくはさらに草木をかき分け道なき道を進みました

実はぼくの趣味のひとつは河川の源泉を探しに行くことです

ぼくのルーズリーフ・コレクションブックには源泉にたどり着くための手書きの地図が数十枚あります

もう一つの趣味はハーモニカで、これの練習が思う存分できる場所もあちこちに見つけてコレクションしています

そして多くの場合、源泉を見つけるのとこれと一石二鳥です

でこの森に湖を見つけたのです。

きっとこの湖が柑子町を流れる川の源泉でしょう

この湖はぼくの秘密の場所でたぶんほかの人は知りません、だからそこへいく方法は書きません

濡れた地面を進んでいけばいいという簡単なものではありません

でもその様子をそっと教えてあげましょう、特に雨が好きな人に

でもこれを読んでもみなさんは行かないほうがいいです、迷子になったらことですから。

これはぼくの友達のカエルのロリンに初めて会ったときの話でもあります。

この静かな湖にぼくは一人乗りの小さなボートを置いています、いつもは水辺の大きな榎の木の下に引上げて裏返しておくのです、しかしやがてこの力仕事は面倒になって水に浮かべたままその木にボートのともづなをかけておくようになりました。

あるときそのつながはずれていてボートは湖の真ん中にありました、

つなをはずした犯人はいたずら好きのイタチのフクスケにちがいありませんでした。

しかたなくぼくは素っぱだかになって泳いでボートまで行ったのです、
といっても二十メートルくらいのことですが。

そしてそれはそのときのことで、
ボートによじ乗って昼寝をしていると、
ぽつぽつと雨が降り始めました。

目をあけると、ぼくのボートのへさきに緑色の小さなカエルがぴよんと乗ってきました、

「雨（あま）ガエルさんですか？」

「ケロケロ ぼくは雨が大好きな雨ガエルです」

「名前はなんていうの？」

「ケロケロ ぼくには名前はありません、カエルは名前なんて付けないのです。そのかわりみんなあだ
名を付けます」

「じゃあ、君のあだ名はなんていうの？」

「ぼくのあだ名はロリンです」

「いいあだ名ですね、でもどうしてカエル君たちは名前を付けないのですか？」

「ケロケロ 昔はつけていたのです。でもすぐにやめてしまいました。それはしかたがないことでした
」

「どうしてやめてしまったの。どうしてしかたがないことなの？ぼくに話してくれないかい」

雨が少し音を立てるくらいになったので、ぼくはボートに置いてあったパラソルを差し、そのカエルに
も雨が当たらないようにしました。

「話しましょう。ケロ、ぼくの上にパラソルを持ってくるのはやめてケロケロ。せっかくいい雨が降って
いるというのに・・・」

「おや、これは失礼。雨ガエルさんはやっぱり雨が好きなんですね。じゃあ存分にぬれてください」
ぼくはかさを自分の上のほうにだけかざして話を待ちました。

「カエルの子供は一度に何百と生まれます。そしてカエルのお父さんお母さんは名前を付け始めます。
初めて子供ができたお母さんとお父さんは特に有頂天になって考え始めます。きっと子供の名前を付け
るのは楽しいことに違いありません。普通まずお父さんがカエルが適当な名を提案します。こんなぐあい
です。

「一番初めに卵から出てきたおたまじゃくしだからタロン」

するとお母さんがカエルは「いいえ女の子かもしれないから、ロレア」

「二番目はよく泳ぐな、スイスイはどうだ」

「もっと強そうな、ズイズイ」

「三匹目、ケロケロ」

「ケロロは隣の8番目の子と同じ名前です。ケルロにしましょう」
するとお父さんガエル「ケルロもどこかで聞いたことがあるような気がするぞ。でもまあいいや」
「四匹目、ケケケ」
「そんなお化けみたいな名前は嫌ですよ、お父さん、ケロリなんてどう」
「それもなんかおかしな名だな。健康そうなケロンパぐらいにしておこう」
「五匹目、少し色が黒いよだからクロンはどう？」
「でもクロンボってあだ名付けられていじめられたらかわいそうよ、きれいなクリンにしましょう」
「六匹目、これはやせているな、ヒョロンはどう？」
「そんな弱そうな名前じゃかわいそう。素敵なヒューロにしましょう」
「七匹目・・・ねえ母さん、少しおなかがすいてきた、きょうはこのくらいにして二人で夕ごはんを見つけないかい」

といった具合で六匹くらい名前を付けると、たいていカエルの両親は名前を付けるのに飽きてきてしまいます。そして次の日にはもうほとんどの卵からおたまじゃくしが泳ぎだして、どれが何番目に出てきたのかわからなくなってしまいます。みんな区別がつかないのでせっかく名前を付けた「ロレア」「ズイズイ」や「ケルロ」「ケロンパ」「クリン」「ヒューロ」もどれがそれやらわからなくなってしまいます。そしてとうとうカエルの両親は名前を付けるのをあきらめてしまいます。

でもおたまじゃくしたちが大きくなり、やがて手と足が出てしっぽがなくなりお互いに話ができるようになるころ、名前がないと不便だからその頃になってみんなであだ名を付け合うのです。それでぼくたちにはあだ名はあるけど名前はないのです。」

ぼくは話をしてくれたお礼にカエルになった王子様の話をその小さな雨ガエルのロリンにしてあげました。最後にカエルが王子様に姿を戻すのがどうしてハッピーエンドといえるのかについて、ロリンは不思議がりましたが、「まあ人間の話はたいてい逆説的だから」と納得しました。そしてロリンはまた会おうねと言って、ボートの縁から湖の中に飛び込みすいすいと泳いでいきました。

雨はやみそうになかったので、ぼくはパラソルをたたんで蛙と反対側にボートを漕いで、大きな榎の木の方に帰ってゆきました。もちろんその日は、ボートを岸に引き上げ、雨が入らないようにひっくり返しました。

ではまた

第二話 フクスケ

私たちのフクスケについては、そのいたずらぶりを少し、前作「ロリン」の中で書きました。

私たちについてはなじみが少ない人が多いでしょう。夜行動物だからです。昼間は昼寝をしているのですが、私たち夜行動物にとっては昼寝は大切です、なぜなら夜は徹夜して働かないと食べ物にありつけないので、昼寝を怠って寝不足だと、ねずみなどの獲物に逃げ切られてしまいます。

フクスケと初めて会ったのは例の森の中の秘密の湖の近くです。ぼくは一人乗りのボートをリヤカーで森の中を通過して湖に運んでいました。汗が体じゅうからふき出して、めがねが鼻の上をずり落ち、何度も手を休めてめがねをずり上げました。そんなときです、フクスケがいきなり飛び出してきて車輪にひかれたのです。みると尻尾にタイヤのあとがついています。そのときのフクスケのなき声ときたらあまりに大げさだったので、思わず笑ってしまいました。え、いたちってどんな声で痛がるかって？それはイタッチ、イタッチ、アウッチにきまってるじゃないですか！

「ハッハ、ごめんごめん、君が急に飛び出してきたから、おじさんよけれなかったよ」

「イッチッチ。やいもっと気をつけてくれよな。尻尾だったからよかったけど、足だったらあすの運動会に出れなくなるところだったんだぞ！」

「ごめん、ごめん。で運動会ってなんだい？」

「あした東京都の選抜選手が、山手線のレールの上を走って、一周するんだ。ぼくは目白と池袋の間を走る。つまりアンカーだぞ！」

「おいおい、山手線なんてあぶないぞ」

「なに、終電が走り終わった深夜にスタートさ」

「そうか、きみらイタ公は夜行性だったもんな。優勝したらどうなるんだい？」

「そりゃあ、スカイツリーのとっぺんを一年間自分たちの家にする許可がもらえるんだ。」

「おいおい、あんな高いところに巣を作ってあぶねえぞ」

「いえてる。だから実際には住まないさ。寒いらしいしね。それに今度の地震なんかのときにとっぺんにいたら振り落とされてしまうだろうしね。」

「何よりも、あそこに登るのがたいへんだろうよ」

「おじさん、俺たちは軽いから、それは平気さーね。・・・まあ象徴的な意味があるんだ。つまりスカイツリーが優勝トロフィーってわけさ」

「ふーん。そりゃあずいぶん立派だな。じゃあスカイツリーがないころは何が優勝トロフィーだったんだい」

「そりゃあ、イタチの宮（みや）杯にきまっているじゃないか！」

ぼくは、すっかり話に引き込まれて、ちょうどいい一休みができたが、そろそろ出発しようかとリヤカーを押し始めると、このいたちはリヤカーに乗せたボートの中に飛び乗ってきた。

「湖に行くんだろ、乗せてもらうぜ。」

「山の手線を一周するといったが、どのくらい時間がかかるね？」

「記録は山の手線内選抜のチームが3年前に出した45分19秒3だ。なんせ、あいつらいつも山手線で練習できるわけで、どこでスピードを上げてどこでブレーキをかければレールから落ちないで走れるか、からだ覚えてるからな。地元の利というやつさ」

「45分なら電車よりも早く一周するわけだ」

「なんせ電車と違ってノンストップだからね。」

「駅伝のようなもんだね」

「ようなもん、じゃなくて、文字通りそうじゃねえか。・・・それでこのボートはどうすんだい」

「森の湖にうかべるさ。これに乗って釣りをしたり、昼寝をしたりさ」

「あの湖には、ワニがいるから気をつけな」

「おいおうそだろ？日本にはワニがないさ」

「ペットで飼われていたやつが、森に捨てられて、あそこの湖に入っちゃったんだ。」

「ペットならおとなしいワニかい？」

「ワニはワニさ。気をつけな。今じゃ湖の主だ。前の主のボラは食われちゃった」

「へえー」 ぼくは悲鳴のような声を上げた。

「おっとそこが俺の家だ。名前はフクスケという。まあお見知りおきを」

フクスケというイタチは飛び降りると、タイヤのあとの残った尻尾を振りながら大きな木の下の太い根っこを門にした穴に入っていった。

ぼくはワニの話を知ったので、物騒な気持ちになり、湖に行くのを躊躇しているとさっきの穴から「ハッハッハ。ひっかかった、ひっかかった。ワニはうそさ。だけどボラの親父には挨拶をして、ボートを入れる許可をとっておくことだな。そしてつりは針を使ってはいけないってことよ」

「わかった。ぼくの名前はひろしだ。お見知りおきを」

ぼくは湖に着くと、「ボラのおやじさん、ボートを入れます。許可をください。また針を使ってのつりはしませんので、つりの許可もください」と大声で言いました。

すると大きなボラが水面から顔を出して、「おれはここの主じゃないから許可など出せん。許可をもらうなら湖の主のワニ親分にもらいな、ふっふっふ」

ぼくはもう引っかからないぞと思い、ボートをリヤカーから下ろして、さっさと水に浮かべました。そしてその中で横になって休みました。

おわり

第三話 ぼら親父

ぼくの秘密の湖の主、ボラ親父がおおぼらふきだと言うことは前のフクスケの話でおわかりいただいていると思いますが、きょうはボラ親父に私がお返しにほらをこいたことの話です。

その日会社を休んだ私は朝から湖にやってきてボートに乗って針なし糸で釣りを始めました。あんのじょうボラ親分がかかった。ぐいぐい引っ張っばられて竿が折れそうになったので竿をはなすと糸をくわえたボラボスがにやにやしなながら顔を出した。

「やい針がなくとも餌ぐらいは糸先に結んでおくものだ、この新米野郎！」

「なにせ、ワニがかかるとおっかないもんでね。」 ぼくも負けていない。

「なあに、ワニよりおっかないのはおまえたち人間さ。その証拠がおまえのそのベルトだ。」

あっ、確かに私のベルトはワニ皮製だった。内張りは子牛の皮だ。私の持っているベルトでは一番高級のものだった。

「こりゃ一本とられた。おやじ、そいで、おまえの好きな餌はなんだい？こんどそれをたくさん持ってくるからよ」

「いりこさ、おかしらつきでないとだめだよ」

「まるでザリガニだね。いりこじゃ、ともぐいというもんじゃないか？」

「うるせえ、魚は大きいのが小さいのを食べる、これがおきてだ。しかし俺はここの主だから、ここの魚を食っちゃいけねえんだ。だから羽虫や水草やミジンコやミミズやオタマジャクシを食べて、もう飽き飽きだ。いりこやあのトンビちゅうのもってきてくれ、めっぼううめえそうじゃないか。お礼に魚たちに、5連続ジャンプなどさせて目を楽しませてやるからさ」

「よっしゃ。こんどくるときはもってきてやるよ。おまい、今5連続ジャンプって言ったが、ひとつおまえがしてみせな。」

「あほお、おれは一回ジャンプのチャンピオンだ。5連続ジャンプはちびたちのじゃれごとだ。一回きりで飛ぶ虫を必ずキャッチするんだ」

「実はほかで5連続ジャンプは見たことがある。川のほとりでハーモニカを吹いていたらいきなりそばでぴょんぴょんぴょんと5回ジャンプをして見せてくれたね。中くらいの大きさの魚だった」

「それは演奏のお礼だったんだろうよ。おまえ笛を吹くんだったら今度ここでもやってみな」

「ここではやりたくないさ。笛の音を聞きつけて、人がやってくると、せっかくのぼくだけの秘密の湖が秘密でなくなってしまう。針付きで釣りをする人たちがたくさんやって来るようになると、おまえもうかうかしておれなくなるだろう」

「そうだな。人間はおまえだけでいい。」

「実はきょうは相談があってきたんだ。」

「なんだい、言ってみな」

「ここだけの話だが、おれの職業は、盗賊というやつだ」

「あまりいい商売じゃねえな」

「ケチなぬすつとは違うんだ。あの有名な三億円強盗はおれたちのしわざだ。去年の金塊盗難事件もこの俺が綿密な計画を建てて成功させたんだ」

「それで相談というのはなんだい」

「実は、近頃なんだか近所で私服警官らしい男たちをよく見かけるようになった。もしかしたらアジトをかぎつけられたかもしれないと心配しているんだ。」

「いよいよ年貢の納め時が来たというわけか」

「いや、盗みの証拠さえなければ捕まらない。そこで盗んだ金塊を別のどこかに隠すことが必要なんだ」

「おお、それでこの湖に沈めようというわけだ」

「さすが飲み込みが早いね。」

「持ってきな、いくらでも沈めな。おれが見張ってやるから」

「助かるね。」

「で、お礼は何だね。こっちはいりこやトンビじゃあすまなさそうだな」

「金の斧と銀の斧をプレゼントしよう。いつの日かきっと役に立つときが来るぜ、へへへっ」

「おっ、このやろう、ひっかけたな。湖の主をばかにしやがって。こんど来るときはおまいのボートは

湖の底に沈んでると思え！」

「ははは、ごめんごめん、でも今度は本当にいりことトンビをたくさんもってくるから」

「そうだ、一本釣りみたいなけちなまねをしねえで、空中にひとつひとつ投げ上げるんだぞ。そしたらおれがジャンプしてうまいところを見せてやる。」

「じゃあな、おやじ」

「あばよ、ほら吹き男」

ぼくは、愉快的気持ちでボートを岸につけて、沈められないように岸に引き上げて、森を帰りました。早く家に帰って、トンビをつまみにビールを飲みたい気持ちになっていました。

おわり

コメント： ほら吹き男と呼ばれてしまいましたが、私のほらは必ずその場でばらします。でないと友達を失います。

第四話 ボス猫

きょうはボス猫の話です。といってもぼくが会ったのではなく、イタチのフクスケから聞いた話です。本名はわかりません。まあ聞いてください。

この夏のある休日の早朝、ぼくは秘密の湖でキャンプ用のテントを張って一日をのんびり過ごすために、飲食物とテントなどを詰めた50リットルサイズの大きなリュックを背負って森を抜けて湖に行った。その途中で仕事帰りのいたちのフクスケがうしろからリュックの上にちゃっかり飛び乗ってきた。フクスケは軽いんだけど、すでにずっしりしたリュックに乗っかられて全体の重みはずしんとこたえた。それに首に毛が当たるとかゆくて仕方がない。

「おい、降りろよ、フクちゃん。重たいんだよ」

「きょうは、仕事で随分くたびれたんだ。頼むよ」

「おまいの仕事は、ただネズミを捕まえて、いたちのチェーン店に売るだけじゃないか。一匹捕まえばその夜の仕事は終わりだって言ってたが・・・」

「きょうはひどい目にあったんだ。猫の縄張りに入ったのが間違いだった。」

「犬の縄張りなら知ってるけど、猫も縄張りがあるんか？」

「あるさ。人間居住地ではずいぶん前に野良犬が駆除されて犬の縄張りはとうになくなって、今では猫の天国だ。きゃつらの縄張りはいたるところにあるさ。」

「なるほど」

「人間の甘やかashiで猫どもは今ではほとんどねずみを捕らなくなったくせに、縄張りだけはしっかり守ってやがるんだ。」

「そうだな、近頃は公園なんかで愛猫家が野良猫にもえさをやってるからな。・・・それで猫に負けるんか、おまえらは？」

「一匹同士なら負けない。ただ猫も我々もお互いけんかすることはなくなった。つまり力が同じくらいだから、いったん一対一でけんかを始めると勝負がなかなかつかずどちらも大怪我をする。そして勝ったとしてもねずみ一匹の取り分だから合わない。しかもたいていけんかが終わる頃にはネズ公のやつはトンずらしている。だからばかばかしいので、いたちと猫はずいぶん昔からけんかをしないんだ。」

「なるほど」

「ただ猫の縄張りの中では話は別だ。やつらはたいてい一匹で行動するが、縄張りに関しては仲間意識があって、それを守るためには連合軍を作るんだ。だからこちらに勝ち目はない」

「それできょうはどうしてきゃつらの縄張りに入っちゃったんだ。飛んで火にいる夏の虫たあおまえのことだ」

「いや、まあ聞け。おれが目をつけたネズ公のやつが、猫の縄なりに逃げ込んだんだ。それを追っかけてつい深入りしてしまった。そしてそのチュー公は猫に助けを求めたってわけだ」

「ねずみも変わったものだね。猫に助けを求めるとは」

「そこだ。近頃のネズ公どもは、これをよくやるんだ。猫の縄張りが安全な避難地帯だと気づいたらしく、その安全地帯に逃げ込むことが多くなったんだ。」

「それじゃ仕事も大変になったんだ」

「だから一晩中かけて一匹も捕まらないことだってある。最近では仕事の後の昼寝をする時間がみじかくなってしまってよ・・・」ここで取ってつけたようにフクちゃんはおくびをした。

「で、きょうは猫とけんかをしたのか、けがはしてないようだけど？」

「けんかはしないさ。ただ猫の連合軍に囲まれてひともんちやくあったんだ。つまりおれは言ってやった。『おまえらは、ねずみを取りもしないくせに縄張りを守っているが、それはお前らがさげすんでいる犬と同じ行為じゃないか』ってね。」

「どういうことだい、その犬と同じ行為ってのは？」

「猫は動物のたくさん出てくるイソップ物語が大好きでね、その中でも一番好きなのが犬の意地の悪さを物語った『飼い葉おけの犬』の話だ。」

「おおあれか、なるほど。」

この話を知らない人のためにかいつまんで説明すると、一匹の犬が、飼い葉おけの中で昼寝をしていると、牛がやってきて、そのおけの中の干草を食べたいのでおけから出てくれと言ったら、その犬は自分では干草など食べもしないくせに、ワンワンほえて、その牛に干草を食べさせなかった、という話です。

フクちゃんは続けて言った。「犬にほえられていやな思いをしたことのない猫はまずいないので、犬の意地悪さをいましめたこの話は猫たちには大のお気に入り、猫の母さんたちは必ず子猫たちに語って聞かせているといううわさだ。」

「なるほど」

「それで、おれはニャン公らに言ってやった、『おまいらがネズミを大切な食べ物としているのなら縄張りもわかる。だけど人間に甘やかされてネズミを食べもしなくなったのに縄張りをしっかり守るとするのは、あの飼い葉おけでキャンキャンわめくワン公と同じじゃないか！おまいらと違って、俺たちイタチにとってはねずみは今でも大切な獲物なんだ』ってね」

「よく言った！フクちゃん」

「きゃつらは一瞬ひるんだ。特にチビたちは、不安そうな顔をボス猫に向けた。ところがこのボス猫、こいつは真っ白い毛並みをしていて神々（こうごう）しさがあるんだが、話す言葉は大違いだ。こいつがこう言った。

『おれたちの縄張り（にゃーぱり）は何（にゃに）もネズミ捕りの独占のためのみにあるんじゃない。我らの崇拝する招き猫大明（みやあ）神様に守られたこの縄張りは侵さざるべき神聖なものだ。それにおれたちが全くネズミを捕まえて食べなくなったにゃんてこたあにゃあ。好みが変わってもっと

おいしいものを食べているだけだ。さて、この神聖な縄張りの中ではおれ様の許可なくいかなる仕事もしてはにゃんにゃい。許可を受けたものでも仕事で得たものの半分を、大明神様の祭司であるこのおれに納めるのだ。今では実はねず公たちは、猫の餌食（えじき）というよりは、チーズとかスルメとかおいしい酒をたくさん貢（みつ）いでくれる忠実なはたらきもの、文字通り忠孝（ちゅうこう）なのだ。ところがおみやあは伊タ公はそのかわいねずみたちを捕らえて滅らそうとする。それにおみやあは縄張りの中で捕まえても、一切おれさまには貢ぎ物なしだ。にやら縄張りに入った伊タ公とチュー公のどちらに味方をすると思うね？わかりきったことじゃにゃあか。縄張りのボスには縄張りの中の住人の身の安全を守る義務もある。だから働き者のチュウ公を、おみやーらのようなよそ者から守るんだにゃ』

そこでおいらは言ってやったね。

『言い分はわかった。だけどきょうのネズミはお前の縄張りの住人じゃない。遠くからここまでおれに追いかけて来て、ここに逃げ込んだんだ。そいつはおれの住んでいる森の住人で、町のいとこのチュウ公と組んでネズミ講まがいの商売を始めて、無知で貧しい動物たちからたくさんの富を巻き上げているんだ。だから天誅（てんちゅう）を下さねばならない。こいつをおまえの縄張りにかくまったりしてみる、この猫たちはみんなあつという間に一文無しにされてしまうだろうよ。何しろ猫に小判とって、あんたらはお金の価値をわかりやしなないんだから』

するとボス猫が口をはさんだ。

『おみやあの博学はわかった。しかしまあ黙って聞け。おみやさっきイソツプの話をしたが、同じイソツプでこういう話があるのを知っているだろう、「イタチとやすり」というんだ。まあ聞きな：一匹のいたちが、かじ屋の仕事場にしのびこんで、そこにあったやすりをなめはじめました。なめっていると甘味がしてくるからです。まもなく、やすりでこすられた舌から血がにじみ出てきました。ところがこのイタチは、それはやすりの鉄さびがとけ出てきたものと思いこんで、そのままやすりをペロペロなめつづけ、とうとう舌がぜんぶすり切れてなくなってしまいましたとき、おーしまいつ、へっへっへ』と言ったね。ひろし、お前この話を知ってたか。」

「知らないね」

「だろ？おれも知らなかった。たとえ知っていたとしても、きゃつがこれを何が言いたいがために引き合いに出したかやはりわからなかったろう。それでただでさえ小さな目を点にして、言葉に詰まっていると奴さんは言ったね。『べらべらしゃべる伊タ公はしまいにゃペロがなくなるってことよ。きょうは許してやる、早いところ行っちみやーな』

それでおいらは、猫たちに大笑いされながら退却したわけだ」

「そりゃあ疲れるわな。おっ、そろそろお前のうちだ」

「ありがとよ」フクスケはぴよんと飛び降りて大木の下の穴に入っていった。そのうしろ姿はなんだか悲壮感が漂っていた。

ぼくは、ポケットから一握りのいりことトンビを出して、フクスケの巣の入口に置いて、「これでも食べて、元気を出せよ」と言った。話題にできなかったが、実ほうわさで先日の山手線運動会で彼のチームはどべになったことも聞いていたのだ。

おしまい

第五話 秘密の湖の秘密

早朝にいたちのフクスケからボス猫とのもめごとを聞かされたその日、午前中は日差しが強かったので、さっそく湖畔の木陰にテントを立て、その中でイヤフォンで音楽を聴きながらボス猫の話をモバイルパソコンに打ち込みました、が途中で疲れたのでやめて横になって音楽だけを聴きました、ら眠くなっていつのまにか寝てました、が大きな音で眼を覚まされました。それはぼら親父の朝一番のジャンプでした。

それで約束どおり持ってきていた、いりこやトンビをボラ親父に投げてやることにしました。親父はまず深くもぐって3メートル近くのジャンプを見せてくれました。「ナイスジャンプ！」とわたしが声援と拍手を送ると、親父は、今の高さの半分くらいの高さにえさを投げてみてくれと言いました。

そこでいりこをその半分くらいの高さに投げると、親父は今度は水面を斜めに飛び上がり、いりこをぱくりと口にくわえました。「ナイスキャッチ！」私はまた声援と拍手を送りました。それはまるでバレーボールのバックアタックのような切れでした。放り上げたいりこが落ちてくるのをキャッチするのではなく、いりこがその放物線の頂点に達した瞬間にタイミングよく食いつくのです。親父はトンビも同じようにキャッチしました。一つもミスしませんでした。

やがて親父はほかの魚らにもジャンプさせましたが、タイミングが難しく、飛び上がるのが早過ぎてえさが来る前に水に落ちたり、反対に飛び上がるのが遅すぎてえさが頭上を越えた跡に宙を舞って空振りするのもいます。そうこうしているうちに突然からすが横から飛び出てきてトンビを横取りする場面もありました。とんびにから揚げをさらわれる、ということわざがありますが、これはカラスにトンビをさらわれたわけです。

私はこのカラスとはあまり仲がよくなく、せっかくもってきたトンビを横取りされるのがいやで、また取られるのがトンビならまだしも、飛び上がった魚が捕まえられたらかわいそうだと思います、もう投げるのをやめました。そして残ったいりことトンビを水面にばらまきコイやフナやカメに与えました。魚たちはお礼に5連続ジャンプなどを見せてくれました。圧巻だったのは数匹の小さな魚がひとつの大きな輪を描くように5連ジャンプをし、いきなりその真ん中からぼら親父が4メートルくらいのハイジャンプを見せてくれたときです。とはいえ彼もカラスが気になるのか、1回で終わりでした。

昼、コンビニで買った弁当を食べたあと、ボートに乗るためにボートを湖に押し入れていると、ボラ親父が、いいものを見せてやるからもぐって見ないかと声をかけてきました。暑い日だったので泳ぐのもいいと思いました。私はかなりの近眼でいつも眼鏡をかけていますので、海などに潜るときは度付きのゴーグル（水中眼鏡）をかけます。そこでいったん家に帰ってそのゴーグルと海水パンツを持ってくることにしました。後者はこの湖にはザリガニがいると聞いていたからです。

ボラ親父がいいものを見せてやるというのは、少々まゆつばもので、一杯くわされる危険もありましたが、きょうは彼の好物のいりことおまけにご所望のトンビをたくさん持ってきてごちそうしていたので、彼もしたてに出るはずで、いたずらが過ぎることもないだろうと思いました。と言うよりはお礼の気持ちからの好意であろうと思われました。

途中スポーツショップで耳栓を買って、そのとき目に入ったシュノーケルも買いました。私は長くもぐってられないからです。シュノーケルには専用の大きなゴーグルがついているので、度付きのゴーグルは無用になりました。

湖に戻ると、ボラ親父が胸びれで手招きしたので、さっそく水に入りました。前に泳いだときもそうだったけど、ここの水は湖にしてはさほど冷たくないのです。ですから、きっと底のどこかに温泉がわいているのだろうと思っています。冬に来てみて凍ってなければきっとそうでしょう。得意の平泳ぎで気持ちよくあっちこっちへ泳ぎまわり、やがてボラ親父のいるあたりに行きました。そこは湖面が浮草に埋め尽くされており、きれいなイトトンボがたくさんいました。

「この下に見せたいものがある」というと、ボラ親父は浮草の下に潜り込みました。私ももぐり込みました。するとどうでしょう、なんだか小型の飛行機のようなものがぼんやり見えてきました。ぼんやりというのは、藻などの浮き草で湖面が覆われているので、湖の中でもこのあたりは特にうす暗くなっているからです。近づいて触ったりして見ると、飛行機の残骸がほとんど原形をとどめたまま沈んでいました。どうしてこんなところに飛行機が沈んでいるのか、と眼を疑いました。プロペラ機ではなく小型のジェット機のようなです。羽根の下にさびてはいるが形はりっぱなジェットエンジンがついています。胴体に文字らしいものが見えたのでその汚れを手で除くと、現れた文字から旧日本軍の戦闘機だとわかりました。そしてこれが不時着や撃墜されたものでないことはどこにも破損した形跡がないことからうかがえます。これは大発見だ、どうしたものだろうか、と思いました。

「これがわしのすみかだ。歴代の湖の主はここをすみかにする。」ぼら親父が言いました。そしてよく

見ると操縦室には先ほど投げたトンビのいくつかが蓄えられていました。

「この飛行機はどうしてここにあるんだろう」私は首をかしげ両方の手のひらを上に向けるジェスチャーで聞きました。

「先代から伝わる話によると、これは新型の飛行機とやらで秘密の装置が仕込まれていて、それを敵に知られなくするためにここに隠したという言い伝えだ」

「そうか確か日本は終戦が近づくころなんとかというジェット戦闘機を開発していたからそれかもしれないな。戦争に負けそうになったとき、この秘密兵器をここに沈めて隠したわけか」

「まあ、そういうところのようだ。亀の尾ナシ、こいつは今99歳というからその頃のことを目撃した唯一のこの住人なんだけど、その尾ナシじじいの話によると、大勢の人間がこの飛行機を押してここまで来て、ボートを浮かべ長いさおで一番深いあたりを探って、飛行機を湖に浮かせそこまで移動して、窓などを開けて沈めたそうだ。」

「なるほど」

「初めは油が浮いて大変くさくて、みんな永らくその近くには寄り付かなかった。その頃の湖の主は鯉で、やがてその飛行機をすみかにするようになった」

「なるほど」

「それ以後、今までに誰もここにこの飛行機を見に来た人間はいない。はじめおまいさんが来たときは、もしや飛行機を調査に来たのかと思ったがな。まあすぐちがうとわかった。」

「調べたらこの湖は地図に載ってないんだ。だから、ここに飛行機が沈められていることをもう誰も知っていないかもしれないな。戦争が終わって半世紀以上たったんだし、秘密の装置といってももう時代遅れのものに違いないし」

「そりゃそうだ。もう秘密じゃなくなってるさ」

「そうするとこの飛行機を調査しても特に得るものがないばかりか、かえってその存在を暴露したら何か不都合を招きかねないと思ったんだろう、進駐軍によって何かの罪に問われかねないとね、だから関係者はみなこのことは誰にも言わないことにしていたのだろう」

「それで地図からも抹殺されたのかもな。それはおれたちにとっては都合のいいことだ」

ぼくはこの旧日本軍の新型ジェット機を思う存分観察した。はじめはぼんやりしていたが眼が慣れたのかはっきり見えるようになった。水面に戻ると、太陽はかんかんでりだ。浮き草がたくさんあっても水中のようすがよく見ることができたわけだ、とわかった。

「親父、ありがとう。きょうのことは恩に着るよ。すばらしいものを見せてもらった。君の住いが誰からも荒らされることのないように、この湖の秘密はしっかり守るよ。」

「また見たくなったらいつでももぐれよ、ひろし」

「ああ」

「きょうはテントでお泊りかい」

「いや、日没までには撤収する。あすは仕事がある。そのうち泊りがけで来るから一杯やりながら話そう」

「そうだな。」

ぼくは岸まで泳いでいき、またテントにもぐって、モバイルに打ち込んでいたボス猫の話を読み返し、

手を加え、一応完成させたので、あるサイトに投稿した。この湖の秘密の話もいずれ投稿しようと思って打ち込みをはじめた。しかしこの湖のありかはだれにもわからないように工夫している。それがぼらボスとの約束だ。

つづく

2012

写真(photos):

amazon.com/author/nagamitz-kazuhiro